

『三国史記』「地理志」の高句麗地名漢字：
おもに日本語との比較による考証

高 木 雅 弘

東洋文庫書報 第47号 抜刷

平成28年（2016）3月

『三国史記』「地理志」の高句麗地名漢字： おもに日本語との比較による考証

高木 雅弘

はじめに

1. 凡例
2. 資料の性格について
3. 音価について
4. 誤記・誤読の可能性のある文字
 - a. 《五谷（城）》
 - b. 《西》
 - c. 「首」《新》
 - d. 《津》
 - e. 「波害平吏」
 - f. 《楊》
 - g. 《僧》
5. 略体字
 - a. 「列」
 - b. 「孔」
 - c. 「寸」
6. 訓読・特殊な読み
 - a. 「珍」
 - b. 「冬」
 - (i) til のように読まれたもの
 - (ii) toŋ のように読まれたもの
 - c. 「仍」
 - d. 「召」

まとめ

はじめに

周知のように、『三国史記』は高麗仁宗の時代、金富軾によって1145年に編纂された歴史書である。東アジア諸国の史書としては、比較的遅い時期に世に出たものであるにも関わらず、古代朝鮮半島の状況を伝える、非常に重要な資料が多く含まれている。その中でも、巻34「雜志」第3・地理1～巻37「雜志」6・地理4（以下「地理志」）の地名に関する資料は格別で、単に地名研究のみならず、言語研究にとっても重要な資料を提供してくれている。特に、巻35、37の高句麗の地名は、それぞれの地名に対する別名の充実など、新羅や百済の地名資料を質的に凌駕している。

高句麗語と日本語は、数詞や身体名称のような基礎語彙で対応する比率が高い言語であるが、従来は地理的・歴史的関係から日本語以外の言語（朝鮮語、あるいは満洲語など）との比較にこだわるあまり、整合性のある祖形の再構に障害が見られた。今回は日本語との比較を基本として、これまで顧みられなかった地名表記に用いられた字句の考証をすすめていきたいと思う。

1. 凡例

文中で使用した記号について、漢字・日本語についてはヨミをあらわすものは「」（鉤括弧）で、意味をあらわすものは《》（二重山括弧）でくくことにした。ただし、書名の中の章節名、異なった刊本名、およびそのことばを強調する場合等についても「」でくくった部分がある。

例、「難穩別」《七重》：「加賀本」

引用した文の補足は〔 〕（角括弧）でくくった。…（三点リーダー）は省略をあらわす。

例、〔兎山郡〕…安峽縣、本高句麗阿珍押縣。

／（スラッシュ、または斜線）は併存している異形をあらわす。

例、+jəj / +ij

～（波ダッシュ）は、漢字・日本語では合成語、または接辞として前後に別のことが接続され得ることを示している。ローマ字表記では、並列を示している。

例、「～盼、～乙」+ (h)il : k ~ g ~ θ ~ j

ローマ字表記の前の*（アステリスク）は、理論的に再構された音であることを示す。不等号記号は、音韻、および意味変化の新旧をあらわす。開いている方が古く、閉じている方が新しい形であることを示している。

例、「達」tal < *tahil < *takaj : 兮 > 弓 > 于

+（プラス）の記号は、ローマ字表記では合成語、または接辞として前後に別のことが接続することを示している。ただし、動詞・形容詞の語幹については-（マイナス）の記号を使用した。語幹が名詞として使われる場合は省略したものもある。

例、「～次」+c < *+tu : suj-《休む》

大文字のCは子音、Vは母音、Nは鼻音をあらわす C₁C₂の数字は変化する以前の順番をあらわす。

例、*C₁iC₂a > C₂aC₁e

略語について、「高」は高句麗語を、「日」は日本語をあらわす。

2. 資料の性格について

これまでも指摘されていたことであるが、この両巻（巻35、37）はそれぞれ性格が異なる。巻35は、高句麗の「南界」（主として朝鮮半島の中部地域）の地域の地名を統一新羅時代、特に景德王代（16年＝西暦757年、冬12月であるので、758年の可能性もあり）以降に改名された名称が掲げられてあり、巻37は地名表のような体裁をとり、それぞれの地名の下に割注で別名を表記したものと、唐の將軍、李勣の「奏状」と称せられる資料から成っている。これらは『三国史記』に特有の史料で、新羅の府庫に保存されていたものであろう。

高句麗語の研究を進める上で重要なのは、巻37の「地名表」と李勣の

上奏文で、これらは新羅が漢江流域に進出し始めた6世紀中葉から、高句麗滅亡の668年前後当時の状態をよく伝えていると考えられる。同巻には、他に百済関係の地名表や所在地不明の地名群も含まれる。

それに対して、巻35は、統一新羅時代の言語意識を反映したものが含まれると考えられる。したがって、巻35の高句麗地名のうち、改名前と後の形からそれぞれ発音と意味が抽出されたからといって、それが必ずしも当時の高句麗語を反映していたとは限らない。資料的価値は巻37よりは落ちると言える。

高句麗地名は、多くが郡県名のような、行政的に付けられたものである。そのため、当該地域の住民の使用言語とはまったく無関係なものも含まれていた可能性が考えられる。しかし、高句麗系言語を使用する民族の分布状態ではなく、高句麗語自体を研究する場合、地名表のように別名が残されたものは、その発音と意味を推定する上で重要な資料となり得る。

今回用いた東洋文庫所蔵の資料は、以下の通りである。それぞれ①、②、③の刊本のように呼ぶこととしたい。書名の前の（ ）括弧内の数字は、東洋文庫で使用されている請求記号をあらわす。

①（Ⅶ-2-134）『三國史記五十卷』

〔高麗金富軾奉宣撰、朝鮮刊【太祖三（明洪武二十七）年跋】鑄字印補寫〕（図3～4）

②（Ⅶ-2-804）『三國史記五十卷』〔高麗金富軾奉宣撰、昭和六年、京城 古典刊行会景印〕（図5～6）

③（Ⅶ-2-1018）『三國史記五十卷附三國史記異體字類』

〔高麗金富軾奉宣撰、日本坪井九馬三・日下寛校、大正二年刊、東京 文科大學史誌叢書之一〕（図7～8）

このうち、②の影印本の原本は、いわゆる「正徳本」として知られる慶州玉山李氏（李彦迪後孫家）本である。これは中宗七年＝正徳壬申年（1512）慶州重刊本の影印で、巻26（第2丁～10丁）は英祖朝（1750年頃）の鑄字本による補印ということである。

③の刊本は、前田育徳会・尊経閣文庫所蔵の「加賀本」を底本とし、闕巻（1、2、23～29、34～36、49、50）は「近衛本」「神田本」に従

い、「金沢本」「井上本」で補訂したもので、大正2年(1913)吉川弘文館刊である。

3. 音価について

漢字の音価は、当初に対象としていた読者層から言えば、基本的には漢字辞書『訓蒙字会』に代表される高麗時代に近い(李氏)朝鮮時代前期の「中期朝鮮語」(または「中世韓国語」)の漢字音で読まれるべきであろう。中国語の中古音の音韻学の原則を無理に適用しようとすれば、かえって実態から乖離してしまうおそれがある。

また、朝鮮語やその漢字音については、ハングル表記にすべきかもしれないが、なるべく多くの読者に理解してもらうことと、古いハングルには現代にはない文字も含まれているので、印刷上の煩を避けるため国際表音式(一部修正)に近いローマ字に改めることとした。

高句麗地名でよく使われる特殊な文字としては「尸」があげられる。以下に見られるように吏読では「尸」の文字は si (= qi) ではなく、流音 (r / l) として読まれたようである⁽¹⁾。また、ほとんど語末(終声)で使われる。

高、「居尸」*kəl 《心》 : 日、「ココロ」kōkōrō 《心》

高、「皆尸」*kel 《牙》 : 日、「キ」ki 《牙》

高、「買尸」*mel 《蒜》 : 日、「ヒル」firu 《蒜》

唐代の中国の記録には、すでにこの文字の使用例が見られ、遼東地方にあった高句麗の地名「加尸」は、「加尸達」kal.tal 《犁山》をあらわすと見られる。これと似たような役割をもった文字に「乙」がある。これは ɨl の音をあらわすが、語末では流音 (r / l) だけをあらわす場合がある。この文字(「尸」「乙」)を l であらわすか、r であらわすかが問題になるが、前後を母音で挟まれたもの以外は、l であらわすのが音韻論的には自然ではないと思われる。

「尸」(r / l) の起源についてはよくわからないが、3～5世紀ごろの記録に見える「婁」(ləu)「盧」(lo) がそれに近い役割をもっていたと見られる。西暦3世紀の『三国志』『魏書』東夷伝に見える《城》をあ

らわす「溝漚」(kəu.ləu = *kol < *kul) は「~忽」+hol の古形である。

高句麗の五部のひとつ「桂婁部」《内部、黄部》の「桂婁」(kueg.ləu) は、後の時代の「骨 kol 《黄》とは母音に違いが見られるが、《黄》は五行思想による中央を象徴する色（東が「青」、南が「赤」、西が「白」、北が「黒」）をあらわしたという見方もできる。もし《内》が《中央》を意味していたとすれば、むしろ「居尸 kəl 《心》と対応し得る（「桂婁」*kue(g)rə < *kōkärä ?）。

4. 誤記・誤読の可能性のある文字

a. 《五谷（城）》

『三国史記』の地理志、巻37の地名表では「五穀郡」の注記に「一云■次云忽」（あるいは、「■次云忽」といふ）としている。この部分は図1にあるように、①の刊本では「弓火云忽」、②の刊本では「亏次云忽」、③の刊本では「兮次云忽」に似た字（実際には「兮」の上の「八」の部分が「人」）になっているが、『正宗実録・地理志』や『東国輿地勝覽』など、(李氏)朝鮮時代以降の後代資料では「于次吞忽」としたものが殆どであり、「于次」は日本語の「イツ」《五》と比較されている⁽²⁾。

高句麗地名には五種類の数詞が残されているが、いずれも日本語と対応する可能性がある。《五》以外の数詞を掲げて見ると次のようになる(巻37、地名表)。

三峴縣、一云密波兮。(三峴縣、あるいは「密波兮」といふ)

七重縣、一云難穩別。(七重縣、あるいは「難穩別」といふ)

十谷縣、一云德頓忽。(十谷縣、あるいは「德頓忽」といふ)

今勿内郡、一云萬弩。(今勿内郡、あるいは「萬弩」といふ)

「密」mil は日本語の mi と対応することは問題ない。「波兮」については後述する。ちなみに、中期朝鮮語の səj、満洲語の ilan、モンゴル語の gurban とは全く似ていない。日本語の「ミ」は *mij のような形に再構し得る。もし、祖形が *mil のような形であれば、語末の流音が日本語では *mirV (V は母音をあらわすが a ではない) のような形で反映されていた可能性が高い。

「七重（縣）」の別名「難穩別」の「別」pjəlは、朝鮮語の pəl《重》よりも日本語の「～へ」《～重》(< *pja)の方に接近している。「難穩」naninは日本語の nana、満洲語 (< 女真語「納丹」)の nadan と対応し得るが、中期朝鮮語の nilkup とは似ていない。モンゴル語の dolugan (< *dal.u.gan? : 参考 dalan 《70》)は何となく似ているが、日本語やトゥングース・満洲系言語以上に近い関係だとは思われない。

「徳」tək は上代日本語の tö と対応すると見て問題ない。「トヲ」töwo と言ったのは、「トヲカ」《十日》の「～カ」《～日》の隠された母音「(ウ)カ」+uka (例:「ムユカ」《六日》、「ナヌカ」《七日》)の影響で成立したものではないか。上代日本語では二重母音を避ける傾向があったから、間に半母音 w を挿入したのであろう。

tö+uka > *tö.wuka > töwoka

これも朝鮮語の jəl (= yəl)、満洲語の juwan (= zuwan)、モンゴル語の arban (中世モンゴル語 harban < *parban)とは全く似ていない。

「今勿内」は、巻35・漢州の項では「今勿奴」となっている。その別名「萬弩」から、「奴」no (「内」nɿj = *nɿ)は《弩》(音 no)を、「今勿」kim.mil は《万》をあらわしていたことがわかる。「～勿」は、「ハリ」《梁》をあらわすことばも「勿」mil といっていることから、日本語で弓を数えるときの量詞、「～ハリ」《～張》と関係があるかもしれない。高句麗語では二音節語の音節末母音 *a が弱化する傾向にある。

+ *mil < + *Npal (N は鼻音をあらわす)

「今」kim の語末が唇音 m で終わっているのは、次の「勿」が唇音で始まっている影響を受けたものであろう。kim < *kən は朝鮮語の k'ŏ-《大きい》の連体形 k'ŏn (古代百濟語「鞬吉支」「コニキシ」《大王》の「鞬」「コニ」< *kän)、日本語の「ココダ」(< *kākä.N+da)《多数》と比較し得る。ただし「千」や「万」のような"大数"は、他言語からの借用も容易であり、言語の系統を決定する資料とはなりえない。《万》をあらわすモンゴル語 tymen (= tümen ~ tümän) がテュルク系言語やペルシア語 tu:man 《1万ディーナール(貨幣単位)、師団》、さらには古代ロシア語 t'ma (= тьма)《一万、無数》のような異なっ

た系統の言語に借用された例を見てもわかる。

本題にもどると、「**■**次～于次」《五》の「～次」は同じ破擦音でも ts をあらわしたのか、硬口蓋音の tʃ (あるいは tɕ) をあらわしたのか問題が残るが、現在は便宜的に c とする方が妥当であり、将来、より正確な再構が可能になれば、そのときに修正されるべきであろう。高句麗語の c の一部は *tu ~ *tü にさかのぼり得る。

高、「租」co < *coho < *tuku 《鶻鶻 (フクロウ)》: 日、「ツク」= tuku 《木菟 (ミミズク)》

高句麗の始祖「朱蒙」(あるいは「鄒牟」「衆解」)も夫余の始祖「東明」と音韻的に対応し、「東明」が「朱蒙」より、「朱蒙」が「鄒牟」よりも古く、『三国史記』巻13「高句麗本紀」に見える別名「衆解」がもっとも新しい発音であると考えられる。「牟」は mo と読まれるが、日本漢字の呉音、万葉仮名では「ム」の音をあらわす。

「東明」*tũŋ.məŋ > 「朱蒙」cuməŋ > 「鄒牟」cum(u) > *cum.(ki) > 「衆解」cuŋ.he

『翰苑』の注に引用された『高麗記』によれば、3世紀の高句麗の官名「(大)對盧」(d'ad.twəd.lo)が7世紀に「吐卒」to.col《大對盧(原文では「大對慮」)》に変化したことも参考になる。『好太王碑文』では「鄒牟王」となっているので、5世紀の初頭には、この音韻変化(tü > cu)が完了していたことがわかる。

ところで、《五》をあらわす高句麗語の最初の文字を「于」とするのは正しいかどうか、疑問をもたざるをえない。それ以外の「弓」や「兮」を単純な誤記と処理してもいいのであろうか。「弓」は確かに「于」の異体字のように見えるが、他の地名、「于烏」や「于尸」では「于」がほとんどで、なぜここだけ異体字を使っているのか疑問がある。すくなくとも、『三国史記』の地名表で《五》を「于次」としている刊本は見出せない。

「弓」kuŋ は日本語の「イ」i と対応する可能性はないが、音韻の対応を考えた場合、日本語の C₁iC₂u (C は子音をあらわし、うしろの数字は順番をあらわす。以下同じ)が高句麗語で C₁uC₂となった例は他に確認されない。上代日本語の「イ」、または「イ列甲類」の発音 i は、

高句麗語では *e のような発音に反映されている。なお、「イ列乙類」i は C_{il} や Col と対応する場合が多い。

日、「イハ」ifa 《岩》：高、「波兮」「波衣」「巴衣」*pa(h)e

《巖、岨》

後述するように、《岨（＝小さくて険しい山、頂の平らな山）》は意味的には「波害」（pa.h_Λj = *pahe）《額》（日本語「キハ」< *kipa 《際》）に近いかもしれない。

「衣」は ij のような音になるが、日本の漢字音の呉音や万葉仮名ではア行の「エ」の発音になり、実際は e に近い音と考えられる。「兮」は h_Λj (=he) のような発音になり、「衣」よりも古い発音を反映していたと見ることができる。日本語の C_{1i}C_{2a} は、高句麗語では C_{2a}C_{1e} のような形に倒置する原則がある。ちなみに、中期朝鮮語 pahoj (> pauj) 《岩》に見られる o や u のような円唇性の母音の存在は確認されない⁽³⁾。

さらに、日本語 i と対応している例で、子音で始まる場合を見てみたい。母音（韻母）が +j_Λj / +ij のように発音されるもの以外に、+_Λj / +aj のように発音されるものも日本語の i（イ列甲類）と対応している。これらも *e に近い音に再構した方が合理的に説明しやすい。

高、「皆尸」k_Λj.l = *kel 《牙》：日、「キ」ki 《牙》

高、「皆」k_Λj = *ke 《王》：日、「キミ」kimi 《君、王》

高句麗の王名に見える「解」（h_Λj = *he）も、これと関係があるかもしれない。日本語には合成語として、「～キ」+ki 《君》という形があらわれる。《王》をあらわす「皆」は、従来、夫余の官名「～加」や《君長》を意味するモンゴル語の qan 《汗》、qayan 《可汗》と比較されてきた⁽⁴⁾。夫余の場合は《君主》を意味することではないが、もし *ka(n) のような発音であれば、後期の高句麗語では *ko(n) のような形になった可能性が高い。

高、「古」ko < *ka 《獐》：日、「カ」《鹿》

高、「吐」to < *ta 《堤》：日、「タ」《田》

高、「奴」no < *na 《壤》：日、「ナ」《土地》

*kaga(n) のような発音であれば、母音間の g は消滅して *ka(n) の

ような形になっていた可能性が高い。

次に m と結びついたことばをいくつか紹介したい。

高、「買」 mɒj = *me 《水、川、井》：日、「ミヅ」 midu 《水》

これも日本語の合成語に「ミ」 mi が存在する。高句麗語で《長池》をあらわす「内米」 nɒj.mi の「米」もこの要素に含まれよう。「米」は、朝鮮漢字音では通常 mi と読まれるが、日本語の漢字音（呉音「マイ」、万葉仮名 mē）から判断すると、古い時代には me に近い音であった可能性が高い。ここでもモンゴル語の møren (= mören) 《江》や満洲語 muke (= mukə) 《水》のような円唇性の母音の存在は確認されない。

高、「買」 mɒj = *me 《慶、善》：日、「ミ」 mi 《神、霊、御～》

高、「買戸」 mɒj.l = *mel 《蒜》：日、「ヒル」 firu 《蒜》

後者は従来「ミラ」《韭》と比較されてきたが、*hipa > pa(h)e 「波兮、波衣」《巖、岨》が音位転換した例を見れば、音韻的にも意味的にもその比較は失当であろう。

ただし、+ɒj（または+aj）の韻母をもったものでも、nɒj ~ naɒj 「乃」「内」「奈」については、同じ高句麗語では「奴」 no と、日本語では「ナ」「タ」（音節末ではオ列甲類の「ノ」 no、「ロ」 ro）と対応している例が見られる。

高、「乃勿」 *na.mil 《鉛》：日、「ナマリ」 < *namal 《鉛》

高、「乃斤」 *nak 《驍》：日、「タケ（シ）」 < *lakia 《剛、健》

高、「内」（「奴」） *nɒ 《壤》：日、「ナ」 < *na 《土地》

高、「内」「奈」 *na 《長、大》：日、「ナガ（シ）」 < *naŋga 《長》

高、「奈兮」 *nahe 《白》：日、「シロ」 < *θila 《白》

高、「奈生」 *naseŋ 《竹》：日、「シノ」 < *siNna? 《篠》

それでは i と e では、どちらが古い音を反映していたのであろうか。卷37の地名表に「買召忽縣、一云彌鄒忽」（買召忽縣、あるいは「彌鄒忽」といふ）というのがあるが、「彌鄒城」は西暦400年頃の記録、『好太王碑文』（『広開土王碑文』ともいう）の第2面に出現しており、「買召」は、新羅が高句麗の「南界」を占領し始めた6世紀中葉以降の記録を反映していると見るべきである。したがって、「買」 me の母音 e よ

りも「彌」mi の母音 i の方が古いことがわかる。

以上のことから、「次」の頭字は「于」u ではなく、「兮」hjəj = *he の誤記であった可能性が高く、*hi にさかのぼる。「次」c^hʌ = c は *tu のような音にさかのぼり得る。なお、日本語の「イツ」を南島祖語の *hituŋ 《数える》と比較する説があることを指摘したい⁽⁵⁾。

hjəj.c^hʌ = *hec < *hitu

誤記のプロセスとしては、兮 > 弓 > 于 (または弓) のような変化が考えられる。「兮」のあたまの「八」の部分が不鮮明になったことであやまりが生じたのであろう。他にも《白城》をあらわす「奈兮忽」の「兮」は、①の刊本では、上の「八」の部分が「ソ」のようになった「芳」に、②の刊本では「八」の下が「万」のような形になっていて、非常に不安定な表記であったことがわかる (図2)。

ちなみに、《五》をあらわす隣接諸言語では、朝鮮語が tasʌs、満洲語が sunja (= sunʒa)、モンゴル語が tabun となり、これらも日本・高句麗語と、すくなくとも表面的には似ていない。ただし、北方トゥングース系エウエンキ語 tunja、南方トゥングース系ナーナイ語の tojŋga ~ toŋŋa は“何となく”似ているが、それ以上のものではない。

《谷》をあらわす「云」は、他の多くの地名に見られるように、「吞」tʰʌn の誤記と考えて問題ない。「吞」tʰʌn が日本語の「タニ」《谷》と対応することは、先学によって述べられてきたとおりである。《谷》には他に「頓」ton、「旦」tan の表記が見られるが、単音節語 *a に由来する高句麗語の母音は、a よりはやや狭い ʌ のような形 (= *tan > *tʰʌn) になったと考えられる。日本語では tani と二音節になるが、本来は単音節のことばであったと考えないと *a > ʌ ~ o への変化は説明し難い。

「～忽」+ hol 《城》は 3 世紀の記録にみえる「溝漚」(kəu.ləu = kol ~ *kul) にあたり、後期の高句麗語では、合成語の 2 番目以降に置かれた場合、k は h (さらにはゼロ) に変化する。上代日本語の「イ列乙類」の母音 i は、高句麗語では +ol ~ +il に対応している場合が多い。

高、「～盼、～乙」+ (h)il 《木》: 日、「キ」kö (合成語では kö+)

< *köj 《木》

高、「骨」kol 《黄》: 日、「キ」(「クガネ」《黄金》の「ク～」)

< *kuj 《黄》

高、「於乙」 ə.ɪl = *əl / *ɪl 《泉》：日、「井」 < *wōj ~ *wāj 《井、堰》

最後の例は、高句麗人名「泉蓋蘇文」（または「蓋金」）にあたる人物を『日本書紀』（巻24、皇極天皇元年2月）では「伊梨柯須彌」となっていることから見て、《泉》をあらわす高句麗語「於乙」の母音は、7世紀の段階では「伊」に近い非円唇性の狭い母音 (i) であったことが想定される。同時に「梨」の存在によって、入声音「乙」の語末（終声）が t でなく、流音 (r / l) であったこともわかる⁽⁶⁾。ちなみに、「蘇文」《金》の「文」 mīn も「彌」に近い非円唇性の狭母音であったことがわかる。これは「乃勿」《鉛》の「~勿」 + mīl と同じく「毛乙」 (= *mol < *mɐl < *mal) 《鉄》をあらわす要素と共通のものであろう。「蘇」 so は、《黄》をあらわす満洲語 suwayan (< 女真語「瑣江」 so.gian < *so:gi.gan) と関係があるかもしれない。

なお、「エ列乙類」の母音 ë (合成語では a と交替するもの) も高句麗語では流音になる。

高、「達」 tal 《高、山》：日、「タケ」 takë < *takaj 《岳》

(「タカ・シ」《高》)

高、「波戸」 pal 《桃 (< 稻 ?)》：日、「ワセ」 < *baθaj 《早稲》

(合成語「ワサ~」)

高句麗語の語末流音 (r / l) と原始日本語の語末の (j) と、どちらが古い語形であったかが問題になるが、「乃勿」 nɐj.mīl (= *namīl) 《鉛》が日本語で「ナマリ」となっている (「ナメ」 *namë とない!) ので、上代日本語の i, ë と対応する語末流音は、高句麗語内部でおこった後天的変化であることがわかる。

日本語の「キ」は《柵》をも意味していたが、「クへ」《柵》の「ク」 (「~へ」は《辺》か) を参考にすれば、「キ」 kī は *kuj のような祖形を再構できる。

b. 《西》

高句麗地名で「西」という字であらわされているものは、次のとおり

である（卷37）。

道西縣、一云都■。（道西縣、あるいは「都■」といふ）

屈於押、一云紅西。（屈於押、あるいは「紅西」といふ）

何瑟羅州、一云河西良、一云河西。（何瑟羅州、あるいは「河西良」といひ、あるいは「河西」といふ）

北扶餘城州、本助利非西。（北扶餘城州は、もと「助利非西」なり）

これらのうち、「河西（良）」と「助利非西」の「西」は、いずれも音をあらわしたものと考えられる。「西」sjə は、日本語の漢字音では呉音「サイ」、漢音「セイ」、万葉仮名では「セ」の音をあらわしている。

「道西縣」の別名「都■」のうち「都」to《道》は、漢語からの借用でなければ、^{*}ta のような音にさかのぼり得る。これは日本語の「チ」(ti < ^{*}tī)《道、路》の母音の変異かもしれない。方向をあらわす「〜チ」（「コチ」《此方》、「アチ」《彼方》）に対する「〜タ」（「コナタ」《此方》、「カナタ」《彼方》）の関係が参考になろう。

「西」をあらわす「■」は、①の刊本では「益」、②の刊本では上から「八・十・皿」を組み合わせたような文字、③の刊本では「今」の下に「皿」の字が存在する文字「盒」である（図1）。「屈於押」の別名「紅西」から判断すると、「押」ap が《西》をあらわしていた可能性が高い。「盒」（今・西・皿）であれば、ap と am の音が存在している。もし中間の「西」の部分省略した「盒」であれば、「押」と通用した可能性が高い。

これらは3世紀の高句麗語とは全く似ていない。

案今高麗五部、一曰内部、一名黃部、即桂婁部也。二曰北部、一名後部、即絶奴部也。

三曰東部、一名左部、即順奴部也。四曰南部、一名前部、即灌奴部也。

五曰西部、一名右部、即消奴部也。（『後漢書』卷85。唐、李賢注）

「西部」または、「右部」をあらわす「消奴部」の「消」は、『後漢書』の元になった『三国志』『魏書・東夷伝』では「涓」（kuan = ^{*}küän）となっている。これは、^{*}kön のような形にさかのぼり得る。モンゴル語の køndelen (= köndelen)《横》に似ているが、音韻的には「消」

siaw の方が ap の音と関連づけられるように見える。何らかの理由で
“修正”が行われたのであろう。

^{*}siʔaw > ^{*}aw.si > ^{*}af(.se) > ap

こうした音韻変化 (C₁iC₂aC₃ > C₂aC₃C₁e: 子音 C のうしろの数字は、
変化以前の順番をあらわす) は、「遼東」「遼水」の「遼」liaw が「烏
列 (= 例?)」ore となっていることから、3 世紀以降～7 世紀以前の
時期におこったことがわかる。

^{*}liaw > ^{*}aw.li > o(o)re

「遼」の場合、^{*}aw はそのまま o: > o に変化したが、「消」の場合は
^{*}aw の後ろの無聲音 s の影響で ^{*}af > ap に変化したものと考えられる。

ちなみに、「屈於」《紅》kul.ə = ^{*}kurə は、モンゴル語の kyreng
(= küreŋ) 《茶色、栗色》に似ている。日本語の「クレナキ」《紅》は
「呉 (クレ) の藍 (アキ)」が語源であるから高句麗語とは無関係である。

c. 「首」《新》

もうひとつ疑問に思われるのは、《新 (あたらしい)》をあらわす「首」
sju である。これは朝鮮語の saj 《新》と比較されているが⁽⁷⁾、母音が
対応しないように思われる。

首知縣、一云新知。(首知縣、あるいは「新知」といふ) (巻37)

「～知」は ti ～ ti ～ t のような音をあらわしていたと考えられ、「首」
sju が《新》をあらわしていたと考えられるが、旧百済の地名では《新》
は「沙 (尸)」sa(l) であらわされている (巻36、熊州)。

[樞城郡] …新平縣、本百濟沙平縣。

[潔城郡] …新良縣、本百濟沙尸良縣。

ところで、『三国史記』の地名の「沙」には「省」と表記された例が
ある。

[新羅・文武王] 十二年春正月、王遣將攻百濟古省城克之。

(王、將を遣はし、百濟の古省城を攻めしめ之に克つ) (巻7)

[新羅・善徳王十三年] …九月、王命爲上將軍、使領兵伐百濟加兮
城・省熱城・同火城等七城、大克之。

(九月、王、命じて上將軍となし、兵を領して百濟の加兮城・省

熱城・同火城等七城を伐たしめ、大いに之に克つ）（巻41、金庾信・上）

「古省」は「古沙（夫里）」kosa(.puri) の誤記であろう。「省熱城」は、「地理志」では高句麗の朔州に入れられた「沙熱伊縣」であろう。この地域は高句麗・新羅・百濟の三国の勢力が角逐した場所で、西暦639年頃は百濟が支配していたことがわかる。

〔奈隄郡〕…清風縣、本高句麗沙熱伊縣。（清風縣は、もと高句麗沙熱伊縣なり）（巻35、朔州）

上記の百濟の地名は、いずれも統一新羅時代に改名された語形がもとになっているので、実際にそれぞれの地元で「沙（尸）」が《新》を意味していたのかどうか不明であるが、高句麗の支配が及んだはずがない百濟の南部沿海地方の「伏忽」pok.hol を統一新羅時代に《宝城》と改名しているのを見ると、他の地域でも高句麗語の知識にもとづいた“翻訳”が行われた可能性は否定できない。高句麗の地名には、《清》をあらわすことばとして、他に「薩」sal も見られる。清川江の古名「薩水」の流域は新羅や百濟の支配を受けたことはないので、「薩、沙尸」sal が高句麗語に起源をもつことばであった可能性が高い。

「沙」も「沙尸、薩」も本来は二音節のことばであった可能性が高いが、「沙尸」（あるいは「薩」）sal が日本語の「サラ」sara 《更、新》と対応するのに対し、「沙」sa (< *saja) は「サヤ・カ」《清》の「サヤ」と対応しよう。《鮮（あざやか）》に「アザヤカ」と「アザラカ」の両形があることも参考になろう。中期朝鮮語の saj 《新》もこれと対応しているが、高句麗語 sa と日本語「サヤ」saja の中間的なタイプを示している。このことは、朝鮮語の形が高句麗語とは別に発展したものであることを物語っている。

《新》をあらわす「首」は「沙>眇（または妙）>省>首」のように、あやまり伝えられて生じたものではないかという可能性を提案したい。この他にも、巻35の「赤城縣」の旧名「沙伏忽」を、巻37の地名表では「沙」の左側の部首の「彳（サンズイ）」が「方」になっている（図2）。こうして見ると、「沙」は記録者により、かなり不安定な表記をされたことがわかる。なお、「沙熱伊」《清風》の「熱伊」njəri 《風》は日本

語の「ナラ・ヒ」《寒風》に似ている。

ほかに《新》にかかわる地名としては「仇次」がある（巻37、鴨緑水以北未降十一城）。

新城州、本仇次忽。或云敦城。（新城州は、もと仇次忽なり。あるいは「敦城」といふ）

「仇次」ku.c は《新》と《敦（＝情があつい）》を意味していたことわかるが、「仇」ku は《童子》を意味する高句麗語「仇斯」ku.s に似ている。「～次」+c は「首次」《牛》、「也次」《母》、「皆次」《王》の「～次」と同じく、何らかの属性をあらわす接尾辞（日本語の連体助詞「～ツ」+tu に相当）であろう。“老城”に対する“新城（＝子城？）”、あるいは子供に対する愛情から“敦”という意味を与えたものであろうか。

「仇斯」を日本語の「コ」《子》と比較する意見があるが⁽⁸⁾、母音が対応していないように思われる。日本語の「コ」《子》は「オ列甲類」の音 ko で、^{*}kua にさかのぼり、トゥングース・満州祖語の ^{*}kuṇā (= kuṇa:) 《子供》と比較するのが妥当であろう⁽⁹⁾。高句麗語では《駒》を意味する「滅烏」の「～烏」+o < ^{*}+h(u)a がそれにあたるのではないか。日本語の「コマ」koma 《駒》は《子・馬》の合成語であると見られるが、高句麗語では《馬・子》という構成になる。「滅」mjəl < ^{*}murá 《馬》はモンゴル語 morin 《馬》などに関連があると考えられるが、日本語とは直接対応しない。日本語の「ウマ、ムマ」Nma は、呉音よりも古い体系の古代中国語（呉音「メ」< ^{*}mia < ^{*}mma < ^{*}mra）からの借用である。

「仇斯」の「～斯」+s は「烏斯」《猪》、「夫斯」《松》、「冬斯」《栗》の「～斯」と同じく指小辞であろう。「仇」ku (< ^{*}kəu) は、モンゴル語の keyked (=keüked) 《子供(たち)》、keyken (=keüken) 《女兒》のkey+ (=keü+) と比較されるべきであろう。言うまでもないことだが、モンゴル民族の勃興はその数百年後になるので、高句麗語に影響を与えたのは、モンゴル語と同系の古代言語である鮮卑語や東胡系の同族語ということになる。

d. 《津》

次に、「平」と「乎」の混同と考えられる例をあげる。

〔長堤郡〕…分津縣、本高句麗乎唯押縣。(分津縣は、もと高句麗の
乎唯押縣なり) (卷35、漢州)

この地名は、卷37の地名表では「平淮押縣」となっている。注記では、
「一云別史波衣。淮一作唯。」(あるいは「別史波衣」といふ。「淮」、あ
るいは「唯」に作る)とある。

「乎」hoと「平」p^hjəŋ は字形こそよく似ているが、発音は全く異な
る。《津(=渡し場)》をあらわすことばは、他に「烏」oがある。

津臨城縣、一云烏阿忽(津臨城縣、あるいは「烏阿忽」といふ)
(卷37)

「乎」は、通常 ho と読まれるが、吏読の読み方では o と on がある⁽¹⁰⁾。
on の方は「乎隱」o.n の「～隱」+ (i)n の文字が省略された形であろ
う。「烏」の音が o であるから、《津》は「乎」のほうが正しいと考え
られる。高句麗語の o は、日本語では u か a と対応すると考えられる
が、日本語の「ツ」tu 《津》とは対応しない。「ヲカ」《岡、陸》の「ヲ」
< *u?a (「～カ」は《処》) が対応するかどうか微妙である。

なお、《分》をあらわす「淮」hoj (または「唯」wi / uj) は、日本
語の「クバ・ル」《配》(「ミ・クマリ」《水分》の「クマリ」も参照) の
語幹と比較できるのではないか。

+hoj = *+hoʔi < *kuwī < *kuNba-

なお、「烏阿」の「阿」a 《臨》は、《向き合う》という意味を尊重す
るのであれば、日本語の「サカ・フ」《逆》の語幹と比較できるかもし
れない。

*θaka- > *haha > *(h)a

日本語の「サ行」の一部は高句麗語では h またはゼロに反映されて
いる。なお、日本語の《白》、《浅い》はそれぞれ南島語の *t'ilak/*t'ilaw
《光、輝く、反映する》、*at'at 《浅い》と比較する説がある⁽¹¹⁾。

高、「奈兮」*nahe < *lahi < *θila 《白》：日、「シロ・シ(シラ～)」
《白》

高、「波戸」*pal < *baθaj 《桃(< 稻?)》：日、「ワセ」《早稲》

(合成語「ワサ～」)

高、「耶、牙」 $ja < *eah < *a\theta a$ 《浅》：日、「アサ・シ」《浅》

また、母音に挟まれた k (あるいは g) は消滅する方向にある。

高、「達」 $tal < *tah\tilde{l} < *takaj$ 《高、山》：日、「タケ」《岳》

(「タカ・シ」《高》)

高、「租」 $co < *coho < *tuku$ 《鶻鶻 (フクロウ)》：日、「ツク」

《木菟 (ミミズク)》

さらに幹収縮、または重音省略による単音節化によって「阿」a という形になったのであろう。以前はモンゴル語の *daya-* 《従う、付いて行く》との比較を考えたことがあったが、意味的にずれることと、基礎語彙のほとんどが日本語と対応しているのに、それを差し置いて他の言語との比較を求めるのは厳密性を欠いたことだった。

e. 「波害平吏」

もうひとつ「平」と「乎」の誤記とみられる地名がある。

〔來蘇郡〕…波平縣、本高句麗波害平吏縣。(波平縣、もと高句麗波害平吏縣) (卷35、漢州)

波害乎吏縣、一云額 (波害乎吏縣、あるいは「額」といふ) (卷37)

「額」は「額」の略体と見られる。「波害」 $pah\Delta j$ は「波兮」「波衣」 $pa(h)e$ 《巖》と発音が似ているが、日本語の「キハ」《際》と対応するかもしれない。

$pah\Delta j (= *pahe) < *paki < *kipa$

「波兮、波衣、巴衣」を「巖」に改名しているのは統一新羅時代のもが多く、本来の高句麗語の別名が反映されていると見られる地名表では「峴」が多い。「峴」が《小さくて険しい山》、あるいは《頂の平らな山》という意味であれば、《額》に近いといえる。これまで《巖》と訳されてきたものの多くは、本来《額 (= 崖)》であったのではないかと考えられる。

「平吏」と「乎吏」は、本来どちらが正しかったのであろうか。統一新羅時代に「波平」と改名されたことから、「平吏」の方を採るべきであろうか。「吏」は「吏」の略体字であったと考えられる。

「平吏」p^hjəŋli (= *pjəŋrī) は、中期朝鮮語の pjəro (< *piraʔu)《崖》に似ているが、やや距離があるように見える。日本語の「ガケ」《崖》は、「カク」《欠ける》の連用形「カケ」に起源をもつことばであると言われるが、「平吏」は、「ヘグ」《削り取る》の自動詞（連用形）「ヘゲ」に対応する可能性がある。

*pjəŋrī < *pjəŋl < *pijaŋgai

《崖》をあらわす地名には「淺」c^hjən の字が使われ、他に同音の「迂」「遷」の字も使われる。「比烈忽」の「比烈、比列」pirjel も《崖》を意味することばの発音に近いと解釈されたため、「淺」の字を当てたものと考えられる⁽¹²⁾。「比烈」は「平吏」とは、母音の発音に距離がある。

淺城郡、一云比烈忽。（淺城郡、あるいは「比烈忽」といふ）（巻37）
また、「迂」が「峴」と対応している例もある。

仇乙峴、一云屈迂。今豊州。（仇乙峴、あるいは「屈迂」といふ。
今は豊州なり）（巻37）

「仇乙」と「屈」はいずれも kul の音をあらわしたと見られるが、「峴」と「迂」が対応しているとすれば、「峴」も《崖》を意味していたことになる。結局、「波害平吏」は似たような意味をもったことば《崖・崖》の重層的な地名ということになる。

f. 《楊》

高句麗地名では、《楊》をあらわすことばは複数確認できる（巻37）。

楊根縣、一云去斯斬（楊根縣、あるいは「去斯斬」といふ）。

楊口郡、一云要隱忽次（楊口郡、あるいは「要隱忽次」といふ）。

大楊管郡、一云馬斤押（大楊管郡、あるいは「馬斤押」といふ）。

《楊根》「去斯斬」の「斬」cam が《根》を意味することは、《高木根》の別名が「達乙斬」talilcam であることからわかるが、これはギリヤーク（＝ニヴフ）語の tʃamγ 《根》に似ていると言われる⁽¹³⁾。「去斯」kə.sə については比較すべきことばが見当たらない。「馬斤押」《大楊管》の「～押」+ ap 《管》は、「甲（比）」《穴》と共通の要素であろう。「馬斤」は《大》をあらわすと見られる。

《楊口》「要隱」jo.in は日本語の「ヤナギ」janagi に似ているが、問

題がないわけではない。高句麗語では j（日本語のヤ行音にあたる）が消滅する傾向にある。

高、「押」ap《岳》：日、「ヤマ」jama《山》

高、「于<郁」u < juk《白?》：日、「ユキ」《雪》

高、「沙」sa《清》：日、「サヤ・カ」《清》

ただし、上代日本語のヤ行の「エ」（=je）の音は、高句麗語では ja の音に反映されている。

高、「也（次）」ja(c)《母》：日、「エ」je《兄、姉（=年長者）》

高、「斯也」sja《項（=うなじ、首のうしろ）》：日、「セ」< *sija《背》

同じ巻に「楊岳、今安嶽郡」という記述があるように、「要」jo は「安」an、または「晏」an の誤記の可能性が高い。もし、*anin であれば、日本語の「ヤナギ」の「ヤナ」（< *janaN）と正確に対応する。同じような変化をたどった例としては、《七》をあらわす「難隱」nanin（< *nanan）があげられる。「ヤナギ」の「〜ギ」は「キ」ki < *kōj であろう。前に鼻音 N があったために濁音になったと考えられる。

「忽次」holc《口》は日本語の「クチ」《口》と対応すると言われるが、話はそれほど単純ではない。日本語形「クチ」は合成語では「クツ〜」という形をとり、その再構形は *kutuj のようになることが想定される。日本語の「ツ」tu は高句麗語では c（場合によっては cu ~ co）という形に反映される。

高、「租」co《鵲（フクロウ）》：日、「ツク」tuku

《木菟（ミミズク）》

「首次若」sju.c + njak《牛首》、「皆次丁」ke.c + tjəŋ《王岐》、「也次忽」jac + hol《母城》の「〜次」+ c も、日本語の連体助詞「〜ツ」+ tu《〜の》と対応するかもしれない。

*kutuj の末音 j は、高句麗語では流音（r / l）の形で反映されるので、「忽次」holc も語末が流音でおわるはずだが、そうになっていない。おそらく音位転換が起り、*kujtu のような形になったのであろう。

*kutuj > *kujtu > *kolc(o) > +holc

ちなみに、《口》にはもう一つ「古次」「串」（いずれも koc）という

異形がある。これは、中間の流音が脱落したか、同化した形であろう。

g. 《僧》

《僧》をあらわす地名は2ヶ所ある。

僧梁縣、一云非勿。(僧梁縣、あるいは「非勿」といふ)(卷37)

僧山縣、一云所勿達。(僧山縣、あるいは「所勿達」といふ)(同上)

《僧》をあらわすことばが2種類あるように見える(「非」「所勿」)。しかし、《僧》はもともと外国由来の概念であり(梵語 *saṃgha* > 漢語 *səŋ*)、「非」*pi* は「僧」と同じく、*siŋ* のような音に起源をもつことばであった可能性が高く、字形のよく似た「升」*siŋ* の誤記ではないかという疑問が起こる。「勿」は、「今勿奴」(別名《萬弩》)のところで述べた「勿」が日本語で弓を数えるときに使うことば「～ハリ」「～張」と関係があるとすれば、同じ音の「ハリ」《梁》と対応するかもしれない。

$m\ddot{u}l < *m\lambda l < *Nbal$

朝鮮語の *m\lambda r\lambda* 《棟、峰》、満洲語の *mulu* 《梁》にも似ているが、高句麗語が単音節の形であった点にちがいがあ。日本語の「ハリ」が「リ」で終わっている点も、本来閉音節語(子音で終わることば)であったことをうかがわせる。

高、「乃勿」 $*nam\ddot{u}l < *na.mal$ 《鉛》: 日、「ナマリ」《鉛》

高、「頓、吞、丹」 $*t\lambda n < *tan$ 《谷》: 日、「タニ」《谷》

日本語のハ行音(< $*p$)が高句麗語の *m* と対応している例は、他に「ヒル」《蒜》(高、「買尸」*mel* 《蒜》)、やや疑わしいが、「フシ」《節》(高、「燕子」*muc* 《節》)があげられる。

「所勿」*so.m\ddot{u}l* の「所」も「升」の誤記の可能性はあるが、「所」*so* は上代日本語の万葉仮名では「オ列乙類」の「ソ」*sö* (または *sə*) であり、むしろ *səŋ* に近い音であったと言える。

5. 略体字

a. 「列」

卷37の李勣上奏文に「鴨渌水以北未降十一城」に、「遼東城州、本烏

列忽」というのがある。「遼東城」は「遼城」とも呼ばれ、「～忽」+ hol は《城》をあらわすから、「烏列」は《遼》をあらわすと見られる。

高句麗語では、日本語の C₁iC₂a、または C₁iC₂o (C は子音をあらわす) が C₂aC₁e のような形になっている。

高、「波兮」「波衣」「巴衣」 *pa(h)e < *hipa 《巖、岨》：日、「イハ」 ifa 《岩》

高、「波害」 *pahe 《額 (= 額)》：日、「キハ」 kifa 《際》

高、「奈生」 *naseŋ < *nasiN < *siNna 《竹》：日、「シノ」 sino 《篠》

高、「奈兮」 *nahe < *lahi < *θila 《白》：日、「シロ」 siro 《白》

したがって、「烏列」は「遼」の倒置形であったと考えられる。「列」ljəl は、おそらく「例」ljəj (=le / re) の略体字であろう。この「遼>烏列」の例から、C₁iC₂aの方がC₂aC₁eよりも古い音であったことがわかる。

liaw > *aw.li > *o(o).re

従来、「買戸」mel《蒜》は日本語の「ミラ」《韭(ニラ)》と比較されてきたが⁽¹⁴⁾、「ミ」miを「買」meと比較するのはいいとして、「ラ」は倒置して第一音節に来なくてはならない。「買戸」は、やはり意味的にも日本語の「ヒル」《蒜》と比較するのが妥当ではないか。《五》をあらわす「兮次」hecも同様の変化を示している(C₁iC₂u > C₁eC₂)。

*Nbiru > *mir(u) > mel

古代の「遼水」は現在の大遼河(大遼水)と渾河(小遼水)を指していたが、大遼河のモンゴル名シラムレン(sir.a mören)《黄・江》および「渾河」の名称から判断すると、「遼」liawには《黄色く濁った》という意味があったと考えられる。

本来の高句麗語では、《黄色》は「骨」kolであった。これは日本語の「キ」< *kuj? (《黄金》「ク・ガネ」の「ク～」)に似ている。

〔沂(一作沂)川郡〕…黄驍縣、本高句麗骨乃斤縣。(卷35、漢州)

「乃斤」《驍(=強い、勇ましい)》の「斤」は、《文》をあらわす「斤戸」kül、《赤》をあらわす「沙非斤」が「沙伏」(= *sapik)と通用して

いる点から k(i) と読まれていたことがわかるが、「乃斤」(nʌj.kin = *nʌk < *lak ?) は日本語の「タケ・シ」《剛、健》の語幹「タケ」(< *lakia) と比較できよう。ちなみに、日本語の「タケ」が南島祖語の *laki 《男、夫》と比較されていることを指摘したい⁽¹⁵⁾。

b. 「孔」

《穴》に関連したことばには「甲比」kap.pi、「甲」kap（合成語の二番目以降では「～押」+ap）の形が見られる（巻37）。

穴口郡、一云甲比古次。（穴口郡、あるいは「甲比古次」といふ）

大楊管郡、一云馬斤押。（大楊管郡、あるいは「馬斤押」といふ）

猪逆穴縣、一云烏斯押。（猪逆穴縣、あるいは「烏斯押」といふ）

穴城、本甲忽。（穴城は、もと甲忽なり）

《穴》をあらわすことばと《管》をあらわすことばが区別されていないにもかかわらず、《孔》をあらわすことばが別のことばでしめされているが、実際に《孔》と《穴》を厳密に区別していたのか疑問が残る。日本語でも《孔》と《穴》はいずれも「アナ」と言う。

[栗津郡] …孔巖縣、本高句麗濟次巴衣縣。（孔巖縣は、もと高句麗濟次巴衣縣なり）（巻35、漢州）

「濟次巴衣」は、巻37では「齊次巴衣」となっている。この地が高句麗・統一新羅の時代に、朝鮮時代初期（『龍飛御天歌』巻3・13章による）のように kumu.pahoj 《孔・巖》のような語で呼ばれた形跡はない。「巴衣」(pa.ij = *pae) 《巖》も pahoj > pauj のような円唇性の母音 (o / u) の存在は確認されない。

「濟次」「齊次」cjəj.cʰʌ は *cec と再構し得る。高句麗語では祖語の *tu が c (=tʃ / ts) に変化したことが知られているが、それよりも狭い母音と結びついた *ti は、なおさら硬口蓋化していたことが考えられる。したがって、*cec の ce は *ci 以外に *ti にさかのぼり得る。もし、*ti であったとすれば、日本語の「チ (チ)」ti(ti) 《乳》、中期朝鮮語の cjəs (< *tisa ?) 《乳》の発音に酷似している。したがって、「孔」が「乳」の略体字である可能性を提起したいと思う。

c. 「寸」

卷37「鴨渌水以北未降十一城」のひとつに、「安市城、舊安寸忽」というのがある。「舊～」としているが、「安市」のほうが前漢時代以前からの古い地名で、「安寸忽」の方が高句麗時代に付けられた地名であることは言うまでもない。

「寸」はそのまま読めば c^hon になるが、「市」si (= ʃi / ɕi) とは発音がことなる。日本の漢文の送り仮名では、「時」(トキ) の略体字として「寸」が使われていたものが見られるが、高句麗でも「寸」が「時」si の略体字として使われていたのではないか。両者の関係は偶然の類似であるが、略字形成の発想としては、共通のものがあつたのであろう。したがって、「安寸忽」《安市城》は an.c^hon + hol ではなく、an.si + hol と読むのが妥当であろう。

6. 訓読・特殊な読み

a. 「珍」

これは tin ではなく、特殊な読み方であつたと考えられる。古代新羅語の「波珍」《海》は『日本書紀』などの日本系資料の訓注では「ハトリ」と読まれ、中期朝鮮語では parɭl ~ paril のような発音になっているが、古くは「珍」が tɭl ~ tɭl に近い音であつたことが推定される⁽¹⁶⁾。高句麗語にもいくつか「～珍」のつく地名が見られる。

〔兎山郡〕…安峽縣、本高句麗阿珍押縣。(卷35、漢州)

〔兎山郡〕…伊川縣、本高句麗伊珍買縣。(同上)

蔚珍郡、本高句麗于珍也縣。(同上、溟州)

〔高城郡〕…偏嶮縣、本高句麗平珍峴縣。(同上)

阿珍押縣、一云窮嶽。(卷37)

伊珍買縣。(同上)

付珍伊、今永康縣。(同上)

平珍峴縣、一云平珍波衣。(同上)

于珍也郡。(同上)

この中で意味を推定できそうなものに、「阿珍」《窮》と「平珍」《偏》

がある。「阿珍押」は、別のところで「阿珍含」となっている（「新羅本紀」巻6、文武王七年冬十月）。「押」ap は《岳》か《穴》か不明であるが、「含」ham であれば「甲（比）」kap(pi)《穴》の異形であった可能性が高く、こちらの方が意味的に（＝窮穴）適合する。なお、「甲（比）」は日本語の方言形「カマ」《穴》と比較できる。

「阿珍」*atil《窮（きわまる）》は、音韻的には日本語の「アツ」《当たる》の連用形「アテ」< *ataj と正確に対応する。

「平珍」p^hjəŋ.til《偏（かたよる）》は、意味的には違いがあるが、音韻的には日本語の「ヘダツ」《隔》の連用形「ヘダテ」(< *pijaN.tataj) と対応する。「ヘダテ」が「ヘ」《辺、端》と、「タテ」《立てる》を意味するとすれば、《偏》とまったく無関係とは言えない。

したがって、高句麗地名漢字の「珍」*til は、日本語の「テ」の一部 (< *taj) と正確に対応する。ただし、同じ「テ」でも *ti(j)a にさかのぼるものは対応しない。

b. 「冬」

「冬」の文字で表記される地名はいくつか存在する。

開城郡、本高句麗冬比忽。（巻35、漢州）

海阜郡、本高句麗冬多 [一作音] 忽郡。（同上）

取城郡、本高句麗冬忽。（同上）

岐城郡、本高句麗冬斯忽。（同上、朔州）

栗木郡、一云冬斯盼。（巻37、地名表）

鐵圓郡、一云毛乙冬非。（同上）

冬音奈縣、一云休陰。（同上）

冬音忽、一云豉監城。（同上）

冬忽、一云于冬於忽。（同上）

「冬」の読みは toŋ 以外に、吏読では til ~ tul のように読まれたようである。その場合、上代日本語の「オ列乙類」のト tö と対応しているように見える。

(i) *tɪl* のように読まれたもの

「冬比」《開》の「冬」が *toŋ* と読まれたとすれば、^{*}*taŋ* のような祖形を再構でき、*tɪl* のように読まれたとすれば、^{*}*töR* (R は流音 *r* / *l*) のような形にさかのぼる。《開》という意味を尊重するのであれば、日本語の「トホ・ル」《通、透》の語幹「トホ」*töfo-* < ^{*}*töpö-* と比較できる。隣接する *l* と *p* の音位転換があったと考えられる。

「冬比」*tɪl.pi* = ^{*}*tɪlpɪ* < ^{*}*tuərpa* < ^{*}*töp(ö)-ra* ?

^{*}*-ra* は、日本語の動詞・未然形の活用語尾と対応する可能性があるが、《取》をあらわす「(于) 冬於」に比べると不確実な点が残る。ひとつの試論として提案したい。

「冬多」の「冬」は、統一新羅時代に「海阜 (= 海岸の丘?)」と改名されたことを考えれば、新羅語「波珍」^{*}*patɿl* > ^{*}*patɪl* 《海》の「珍」と同じく、*tɿl* ~ *tɪl* のように読まれた可能性が高い。

「冬多」(または冬音)《豉監》のうち、「監」は「鹽(塩)」のあやまり、または略体字と見ることは可能であろう。これは満洲語の *dabsun* (< モンゴル語 *dabusun*) 《塩》に似ているように見えるが *dabusun* の +*sun* は接尾辞で、*dabu* が語根になる。テュルク語の *tuz* < ^{*}*tur* 《塩》を考慮に入れば、^{*}*dabur* のような音を再構できるかもしれないが、モンゴル語の *d* は、高句麗語では消滅する傾向があるので、再検討が必要になる。

高、「押」*ap* 《岳》: 日、「ヤマ」*jama* 《山》: モンゴル語 *dabagan* 《峰》

そもそも「冬多」全体を《塩》と解釈することは不適切であり、《豉(シ)》(= 豆を醗酵させた食品・調味料)の存在も無視するわけにはいかない。

「多」*sam* (*sjəm* の可能性もあり) は、「冬」*tɪl* の後に付加されるべき接尾辞 +*s* が *am* (または *jəm*) と合成した形であろう。「音」*im* は、さらに母音が弱化した形ということになる。^{*}*am* / ^{*}*jəm* はむしろ古代中国語の「鹽」*jiəm* < ^{*}*hiam* からの借用の疑いが残る。

tɪl.sam = ^{*}*tɪl.s* + *am* / ^{*}*tɪl.s* + *jəm* > *tɪl(s)+im*

tɪl は ^{*}*töRV* (R は流音、V は母音をあらわす) か、^{*}*töj* のような

音にさかのぼり得る。上代日本語には見あたらないが、中古以降の形「トラ・ク〜トロ・ク」《蕩（＝溶ける）》の語幹、「ドロ」《泥》のように、水に溶ける味噌のような形状に関連したことばの可能性はある。

「冬忽」《取城》の「冬」が *tɪl* と読まれたとすれば、日本語の「ト・ル」《取る》に似ているように見えるが、語幹は *tör-* ではなく *tö-* であったと考えられる。高句麗語の動詞では活用語尾の存在は確認されないが、もし、その痕跡が表記されたとすれば、高句麗語の系統問題の解決にとって注目すべきことになる。「冬於」*tɪl.ə* は **tö-rä* の異分析の変化形であろう。これは日本語「ト・ル」《取る》の未然形「ト・ラ」の母音調和した形であると考えられる。

「于」*u* は **ju* ～ **(e)ü* ～ **iCu* (*C* は子音、特に *k* ～ *g* ～ *θ* ～ *j*) のような形にさかのぼる可能性があるが、具体的に何を意味するのかが不明である。何らかの目的語をあらわした可能性がある。

「冬斯」《栗》の「冬」が *toŋ* と読まれたとすれば、**taŋ* のような形にさかのぼり得る。*tɪl* であれば、日本語の「トチ」《柝、杙》と対応する可能性がある。「トチ」の上代語音は知られていないが、「柝、杙」のつくり「万」が十（ト）と千（チ）をかけた意味をもつ文字だとすれば、**töti* を再構できる。

「斯」+*s* は「夫斯」《松》、「去斯」《楊》、「烏斯」《猪》などの「〜ス」と同じく、何らかの接尾辞（おそらく指小辞 **+sa* ～ **+sä*）であろう。これは日本語の接頭辞「サ〜」《小〜、狭〜》と比較できる。高句麗語では接頭辞の存在が確認できない。日本語では接尾辞はもちろん、生産的な接頭辞の存在も確認できる。もし、日本語の接頭辞が「後天的」に発生したというのであれば、どういう条件で接頭辞が発生したのかを合理的に説明する必要がある。

ところで、高句麗語では重音を省略する傾向がある。

高、「古衣」**ko?e* 《鵠》：日、「ククヒ」< **kuku.pi* 《鵠》

《鵠＝白鳥》は南方トゥングース系のいくつかの言語では次のようになる。もちろん、これらは鳥の鳴き声による命名の可能性が高いと言える。

オロチ語 *kuku*、ウデヘ語 *kuxi*、ウリチ語 *kuku*、オロッコ語

kukku ~ kuku、ナーナイ語 kuku

なお、中期朝鮮語の kohaj 《鵠》も関係が認められるが、高句麗語の形よりも古い音を保存しているように見える。

これから考えると、「冬」は語末が流音化し、さらに重音省略形が変化をとげたものであろう。

${}^*t\ddot{o}t\ddot{o}j > {}^*tu\ddot{e}tu\ddot{e}l > {}^*t\ddot{e}l > t\ddot{i}l$

《ドングリ》をあらわす中期朝鮮語 tot^hol.wam (+wam は pam 《栗》の変形)の tot^hol は、母音の種類に違いが見られるが、重音を保存している点、語末が流音になっている点が注目される。新羅語などの韓系言語が高句麗語に近い系統の言語(濊語?)から借用した可能性も考えられる。

「脛」hül 《木》は、上代日本語の「キ」kī < ${}^*k\ddot{o}j$ 《木》と比較できる。

$+h\ddot{u}l < {}^*k\ddot{e}l < {}^*ku\ddot{e}l < {}^*k\ddot{o}j$

ちなみに、日本語の「キ」《木》は、南島語の祖形 *kahiu 《木》やその異形 *kahui と比較する説があることを指摘したい⁽¹⁷⁾。

「冬音奈」《休陰》の「冬音」tīlim 《休》は、上代日本語の「ト・ム」《止、留》の連用形「ト・メ」< ${}^*t\ddot{o}.maj$ と対応し得る。おそらく音位転換が起こったのであろう。

${}^*t\ddot{o}.maj > {}^*tu\ddot{e}.m\ddot{a}l > {}^*t\ddot{e}.m\ddot{i}l > t\ddot{i}l\ddot{i}m$

「奈」nΛ 《陰》は、別の場所では「奴音」nom という形になっている。同じく、日本語の「ナバ・ル ~ ナマ・ル」《隠れる》の語幹と比較できる。

$n\Lambda(m) < {}^*nam(b) < {}^*naNba-$

「休」には、他に suj / soj のように読まれたものもある。

休壤郡、一云金惱。(休壤郡、あるいは「金惱」といふ)(巻37)

「惱」(no > noj)が「奴」「内」と同じく《壤》を意味することばであることは問題ない。「休」は、hju ではなく、《金》を意味する当時の朝鮮語の soj のように読まれたと見られる。これは朝鮮語の suj-《休む》の発音に近いが、日本語の「ヤス・ム」の語幹とも比較できる。

soj- < *suja- < *jasu-

(ii) toŋ のように読まれたもの

次に toŋ と読まれた可能性のあるものを挙げたい。その場合、日本語の「タ」ta、または「オ列甲類」のト to と対応しているように見える。

「冬斯」toŋ.s 《岐》の「～斯」+s は指小辞であろう。「冬」toŋ は *taŋ にさかのぼり得る。他に《岐》をあらわすことばとして、「丁」がある。

王岐縣、一云皆次丁。(王岐縣、あるいは「皆次丁」といふ)

(卷37、地名表)

「皆」kʌj = *ke 《王》は、日本語の「キ(ミ)」《君、王》と、「～次」+cʰʌ = *+c は、日本語の連体助詞「～ツ」+tu 《～の》と対応し得る。

高句麗語では、日本語の C₁aC₂a の一部が C₁jaC₂ (または C₁jəC₂) のような形に反映されているものがある。

高、「耶、牙」ja- < *ea(h)- < *ahá- < *aθá- 《浅》:

日、「アサ・シ」《浅》

高、「熱伊」njəri < *near.hi < *nará.pi 《風》: 日、「ナラ・ヒ」《寒風》

高、「昔」sjək < *seak < *saká 《菁 (=草木が生い茂る)》:

日、「サカ・ユ」《榮》、「サカ・ル」《盛》

高、「折」cjəl < *ceal < *calá 《銀》: 日、「サラ・ス」《晒 = 白くする》

したがって、日本語の「丁」tjəŋ は *taŋá にさかのぼる可能性がある。「冬」toŋ は単音節語の *taŋ から変化したのに対し、「丁」tjəŋ は二音節語 *taŋá から変化したのであろう。また、アクセントが二音節目に存在したため、特殊な音韻変化をとげたものと考えられる。これは《銀》をあらわす「折」*cjəl と「召戸」*col 《木銀 (=水銀?)》との関係も同様で、同じ語源から派生した、いわゆる双生語 (doublet) にあたる。

《鐵圓》をあらわす「毛乙冬非」の「毛乙」mo.il (= *mol < *mal) 《鉄》は、《鉛》をあらわす「乃勿」namil の「~勿」+mül (日本語「ナマリ」の「~マリ」と比較できる。二音節語の末音節では a が i に変化したのに対し、単音節語では a が o (または ʌ) に変化したと言える。

「冬非」*toŋ.pi は日本語「マト」mato 《的》、「マト・カ」mato.ka 《円》、「マタ・シ」《全》と関係があるかもしれない。高句麗語の「非」pi = *pī < *pa は接尾辞的な機能をもった要素であろう。

*toŋ.pi < *taŋ+pa

高句麗語の接尾辞の一部は、日本語では接頭辞になっている。「~斯」*+s は日本語の指小辞「サ~」《(「狭」と表記されることが多い)》と対応し得る。「~非」も日本語の「マ~」《真》と比較できるのではないか。

c. 「仍」

この文字は中期朝鮮語の漢字音では zŋj と読まれるが、これは日本漢字音の漢音「ジョウ」に近い。呉音では「ニョウ」と読まれ、高句麗地名の「仍」も鼻音で始まっていることをうかがわせる。

槐壤郡、本高句麗仍斤内郡。(卷35、漢州)

[黒壤郡] …陰城縣、本高句麗仍忽縣。(同上)

[栗津郡] …穀壤縣、本高句麗仍伐奴縣。(同上)

[溟州] …旌善縣、本高句麗仍買縣。(同上、溟州)

順序は前後するが、《陰》をあらわす高句麗語は、他に「奴音」、「奈」、「寒」がある。

[介山郡] …陰竹縣、本高句麗奴音竹縣。(卷35、漢州)

[朔庭郡] …霜陰縣、本高句麗薩寒縣。(卷35、朔州)

冬音奈縣、一云休陰。(卷37、地名表)

「奴音」no.im = *nʌm と「奈」nʌj = *nʌ は関連があるかもしれない。日本語の「ナバ・ル」「ナマ・ル」《隠れる》の語幹と対応し得るが、高句麗語はさらに単音節化が進んだ形であろう。「仍」は「奴音」よりもさらに収縮が進んだもので、現代日本語の「ン」のように音節を形成す

る鼻音 (M と表記) だったのではないかと考えられる。母音の前後に鼻音が存在し、その母音が弱化したことによってこのような音になったと考えられる。なお、日本語の「ナバル」の語幹は、南島祖語の ta(m) bəŋ 《かくれてあること》の前鼻音化形 *N|tamba と比較する説があることを指摘したい⁽¹⁸⁾。

*naNba > *nam > *nʌm > *nīm > *M

「薩寒」の「薩」sal 《霜》は、日本語の「サエ」< *sajaj 《冱=冷たく凍る》と対応し得る。「寒」han は日本語の「カゲ」kagë < *kaNkaj 《陰》に似ているが、正確には対応しない。

《槐》をあらわす「仍斤」の「~斤」は、*k(i) と読まれたと考えられるので、*Mk のような形になる。*M は *NVN (N は鼻音、V は母音をあらわす) にさかのぼる。これは《木》をあらわす朝鮮語 namo < *namok (主格 namki 《木が》) に対応し得る。

*namok > *nʌmk > *nīmk > *Mk

《穀》をあらわす「仍伐」の「仍」も *NVN にさかのぼり得る。これは日本語の「モミ」(上代語の形は不明)《粃》か、「モモ」《桃<果実》と比較できるかもしれないが、不確実性が残る。

「モミ」momi < *momī < *NboNboj > *mʌmbʌl > *Mpil 「仍伐」

《旌善》をあらわす「仍買」は、巻37の「地名表」では「乃買」となっている。この「乃」は「仍」の略体字である可能性が高い。「仍」*M < *NVN 《旌》は、日本語の「ヌノ」《布》と比較できるかもしれない。

*nənu > *nən > *nīn > *M

ちなみに、日本語の「ヌノ」は、南島祖語の *tənun 《織ること》の動詞形、*[mə]Ntənu 《織る》と比較する説があることを指摘したい⁽¹⁹⁾。

d. 「召」

「召」は sjo 読まれるが、高句麗地名に使われている音は co (=tʃo / tso) と読まれた可能性が高い。

[栗津郡] …邵城縣、本高句麗買召忽縣。…一云慶原。買召、一作弥鄒。

(邵城縣は、もと高句麗の買召忽縣なり。…あるいは「慶原」と

いふ。「買召」、あるいは「弥鄒」に作る) (巻35、漢州)
買召県、一云彌鄒忽。(買召縣、あるいは「彌鄒忽」といふ) (巻37、地名表)

[鴨緑水以北逃城七] …木銀城、本召戸忽。(木銀城は、もと召戸忽なり) (同上、李勣上奏文)

「彌鄒忽」は、『好太王碑文』(または『広開土王碑文』)の第二面に「彌鄒城」という形で出現しており、「彌鄒」の「彌」miの方が「買召」の「買」mɐj = *meよりも古い音をあらわしていたことがわかる。同様に、「鄒」tʃʰu = *cuのほうが「召」coよりも古い音をあらわしていたと言える。ちなみに、「彌(または弥)」mi > 「買」*me《慶》は、「買」《善》と同じく、日本語の「ミ」《神、霊、御〜》と、「鄒」*cu > 「召」*co《原》は、日本語の「ス」《洲》と比較し得る。

「水銀」という名称は見慣れないものである。「水銀」の誤りではないかと思うが、《木》であれ《水》であれ、それにあたることばは見当たらないので、このままにしておく。高句麗語では《木》の語頭の形は知られていないが、語中・語尾の形は「〜乙」「〜盼」* + (h)ilであり、《水》は「買」「米」*meとなるはずである。

《銀》をあらわす高句麗語は、他に「折」cjəlがある。日本語のC₁aC₂aの一部が高句麗語ではC₁jaC₂(またはC₁jəC₂)のような形に反映されているものがある。

高、「耶、牙」ja < *ea(h)- < *ahá- < *aθá-《浅》: 日、「アサ・シ」《浅》

高、「熱伊」njəri < *near.hi < *nará.pi:《風》: 日、「ナラ・ヒ」《寒風》

高、「昔」sjək < *seak < *saká《菁 (= 草木が生い茂る)》:

日、「サカ・ユ」《栄》、「サカ・ル」《盛》

「折」は日本語「サラ・ス」《晒 = 白くする》の語幹(*calá-)と比較できる。それに対して「召戸」の方は、単音節語*calが変化したものであろう。これらは日本語の「サラ・ス」《晒す》と対応し得る。なお、日本語の「サラ・ス」は、アルタイ系の諸言語と比較する説があることを指摘したい⁽²⁰⁾。

(北方トゥングース系) エウエンキ語 calban 《白樺》

トルクメン語 cal 《灰色の、銀髪の》

古代トルコ語 cal < ^{*}cal 《銀髪の、灰色の》

まとめ

『三国史記』巻37地理志の地名表の別名と李勣の上奏文の「旧地名」は、中国、その他の国の史料には見えないもので、特に高句麗の地名・言語を研究する上で、非常に重要なものである。これらの史料の存在によって、高句麗語の系統に関する恣意的な議論に、一定の歯止めがかかることが期待できる。まさに奇跡の伝承といってもいい。

残存する語彙の形態素（特に、動詞や形容詞の活用語尾）の貧弱性のため、今後も高句麗語の系統をめぐって、日本語に近いか、朝鮮語に近いか、あるいはトゥングース・満洲語、その他の言語に近いか、といった議論がくりかえされることが予想されるが、基礎語彙の対応という点に関しては日本語以上に質・量ともに凌駕した言語は他に見当たらない。

今回は、日本語と高句麗語の音韻対応の法則を導き出し、それにもとづいて、高句麗地名の表記に使われた漢字の文字自体のあやまり、読み方の訂正等を試みたものである。

注

- (1) 鮎貝房之進「借字攷」(1)『朝鮮学報』7、昭和30年(1955)3月、p.28
- (2) 新村出「国語及び朝鮮語の数詞について」『芸文』7(4)大正5年(1916)、p.18
村山七郎「日本語および高句麗語の数詞」『国語学』、1962、p.48
李基文「高句麗の言語とその特徴」『白山学报』4、1968、p.127、137
〔高句麗의 言語 와 그 特徴〕
- (3) 前岡恭作・坪井九馬三「三韓古地名考補正」『史学雑誌』36(7)、大正14年(1925)7月、p.526〔京都大學文學部國語學國文學研究室編『前岡恭作著作集』1974、p.330に所収〕

- (4) 李基文「高句麗の言語とその特徴」、p.120、135
- (5) 泉井久之助「日本語と南島語」『民俗学研究』17（2）、1953、p.122
- (6) 李基文「高句麗の言語とその特徴」、p.121
- (7) 李基文「高句麗の言語とその特徴」、p.134
- (8) 李基文「韓国語形成史」、p.83〔『韓国文化史大系』5・上「言語・文化史」、高麗大学校民族文化研究所、1967〕
- (9) 村山七郎『国語学の限界』昭和50年（1975）、p.102-103、238
- (10) 鮎貝房之進「借字攷」（1）『朝鮮学報』7、p.46
同上（2）『朝鮮学報』8、昭和30年（1955）10月、p.1
- (11) 泉井久之助「日本語と南島語」、p.120
- (12) 鮎貝房之進「借字攷」（3）『朝鮮学報』9、昭和31年（1956）3月、
p.413～416
- (13) 李基文「高句麗の言語とその特徴」、p.137
- (14) 李基文「高句麗の言語とその特徴」、p.133
- (15) 村山七郎『国語学の限界』、p.85
- (16) 金沢庄三郎「朝鮮古地名の研究」『朝鮮学報』3、昭和27年（1952）5月、
p.10
鮎貝房之進「借字攷」（1）『朝鮮学報』7、p.5
- (17) 村山七郎『日本語の起源』、昭和48年、p.101、102
- (18) 村山七郎『国語学の限界』、p.218
- (19) 村山七郎「日本語系統の問題について」、p.126〔馬淵和夫編『世界の言語学者による論集：日本語の起源』武蔵野書院、昭和61年（1986）〕

参考資料

大野晋ほか編『岩波古語辞典』東京、岩波書店、1974。

河野六郎『河野六郎著作集』1～3、東京、平凡社、1979～1980。

上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典・上代編』東京、三省堂、1983。

中枢院編『吏読集成』東京、国書刊行会、昭和50年（1975）。

馬淵和夫ほか編『『三国史記』記載の「高句麗」地名より見た古代高句麗語の考察〕〔『文芸言語研究（筑波大）・言語篇』4、筑波大学文芸・言語学系、1979〕。

南廣祐編『古語辭典』ソウル、一潮閣、1971。

Lessing, Ferdinand D., ed. Mongolian-English dictionary.

Berkeley & Los Angeles, 1960.

ツインツイウス編『トゥングース・満洲諸語比較辞典』

〔Цинциус, В. И. Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков,

И-П. Ленинград. “Наука”, 1975, 1977〕.

(明治大学大学院文学研究科・博士前期課程修了)

図1 卷37「地名表」 五谷郡・道西縣

五谷郡
云一
云弓
忽火

刊本①

五谷郡
次云
云忽

刊本②

五谷郡
次一
云云
忽今

刊本③

道西縣
都一
益云

刊本①

道西縣
都一
益云

刊本②

道西縣
都一
益云

刊本③

図2 卷37「地名表」奈兮忽・沙伏忽



刊本①



刊本②



刊本③



刊本①



刊本②



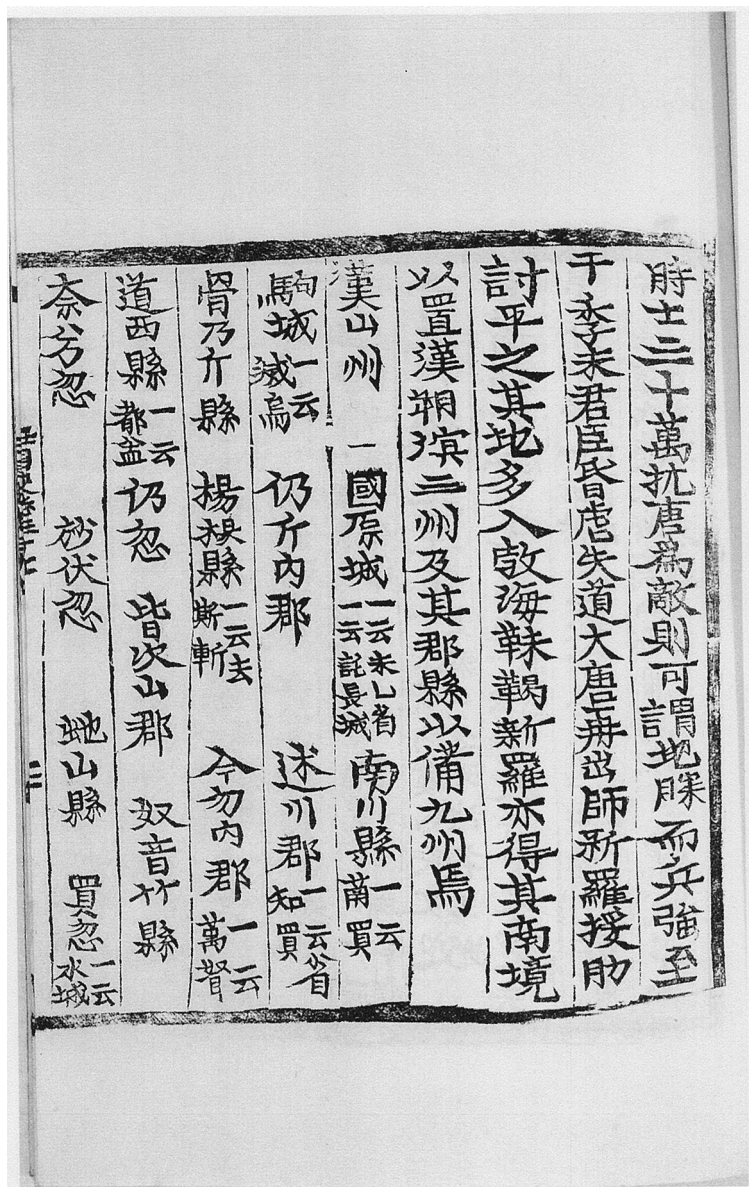
刊本③

图3 卷37「地名表」刊本①A

<p>漢山州 國原城<small>一云未乙省</small> 南川縣<small>一云南買</small></p>	<p>駒城<small>一云減烏</small> 仍斤內郡 述川郡<small>一云省</small></p>	<p>骨乃斤縣 楊根縣<small>一云斯新</small> 今勿內郡<small>一云萬督</small></p>	<p>道西縣<small>一云都益</small> 仍忽 皆次山郡 奴音竹縣</p>	<p>奈弓忽 砂伏忽 蛇山縣 買忽<small>一云水城</small></p>	<p>唐城郡 上忽<small>一云車忽</small> 釜山縣<small>一云松村活達</small> 栗木</p>	<p>郡<small>一云斯勝</small> 仍伐奴縣 齊次巴衣縣 買召</p>	<p>忽縣<small>一云忽鄉</small> 樟項口縣<small>一云忽也</small> 主夫吐郡</p>	<p>首余忽 黔浦縣 童子忽縣<small>一云斯波衣</small> 平淮</p>	<p>押縣<small>一云衣淮</small> 北漢山郡<small>一云平壤</small> 骨衣內縣</p>
---	---	--	--	--	--	---	---	--	---

屈於押	紅一西云	冬比忽	德多縣	津臨城縣
阿一云鳥	穴口郡	比一云甲	冬音奈縣	休陰
高木根縣	乙一云達	首知縣	新知	大谷郡一云
忽多知	水谷城縣	旦一云買	十谷縣	頓一云德
冬音忽	監一云鼓	刀臘縣	一云雒	五谷郡一云
弓火	內米忽	一云池城	漢城郡	一云漢忽
一云忽	鵠鵠城	一云租被衣	獐塞縣	所於
乃忽	冬忽	冬一云于	今達	仇乙峴
今豐州	關口今儒州	栗口	栗一云	今殷栗縣
長淵今因之	麻耕伊今青松縣	楊岳今安		

図5 卷37「地名表」刊本②A



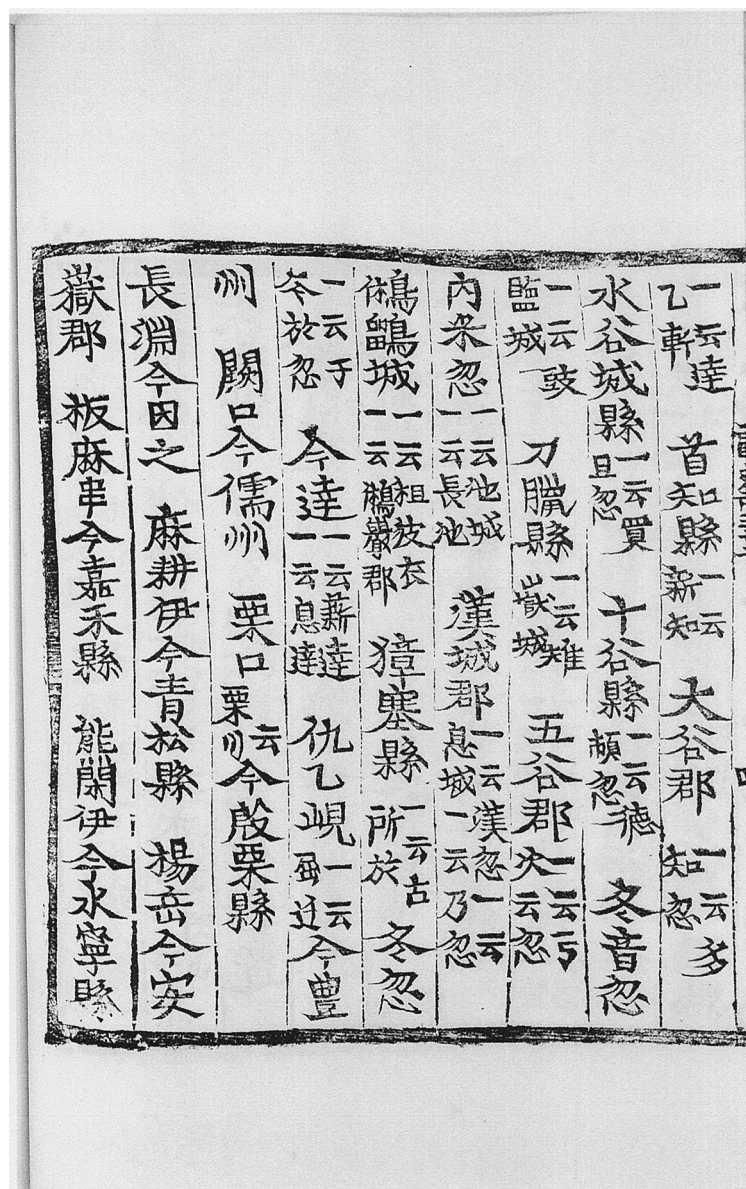


図7 卷37「地名表」刊本③A

神田本近衛
本地理第二
楊楊作楊根
神田本萬督
作萬督
神田本都益
作都益新刊
本作都益
文獻備考抄
伏忽作沙伏
忽神田本作
妙伏忽

再出師。新羅援助。討平之。其地多入激海。靺鞨。新羅亦得其南境。
以置漢朔漠三州。及其郡縣。以備九州焉。

漢山州

國原城

一云。未乙城。省。

南川縣

南一云。買。

駒城

滅一云。鳥。

仍

斤內郡

述川郡

知一云。省。

骨乃斤縣

楊楊縣

斯一云。去。

今勿

內郡

萬一云。賢。

道西縣

都一云。益。

仍忽

皆次山郡

奴音竹縣

奈

兮忽

抄伏忽

虵山縣

買忽

水一云。城。

唐城郡

上忽

車一云。忽。

釜山縣

村一云。活。達。

栗木郡

斯一云。冬。脰。

仍伐奴縣

齊次巴衣縣

買召忽縣

都一云。忽。彌。

獐項口縣

也一云。忽。次。古。斯。

主夫吐郡

首余忽

黔浦縣

童子忽縣

斯一云。波。仇。

平淮押縣

衣一云。別。史。唯。波。

北漢

山郡

平一云。義。

骨衣內縣

王逢縣

安一云。藏。王。皆。

之伯。漢。氏。美。王。女。迎。

買省

図8 卷37「地名表」刊本③B

<p>神田本近衛 本地理第四 王岐作玉岐</p>	<p>神田本新刊 本硯作磁</p>	<p>神田本新刊 本長城作長 池近衛本作 長地</p>	<p>新刊本今火 云忽作弓火 云忽神田本 作今火云忽 輿地勝覽作 于次吞忽文 獻備考註云 一云弓火又 于次吞忽</p>	<p>縣<small>一云雉</small> 五谷郡<small>次一云忽今</small> 内米忽<small>一云池城</small> 漢城郡<small>漢一忽云</small></p>	<p>縣<small>一云雉</small> 雉城<small>一云忽城</small> 鵠鵠城<small>一云雉波衣郡</small> 獐塞縣<small>所一云古</small> 多忽<small>于一多云</small></p>	<p>忽於 今達<small>一云新達</small> 仇乙<small>一云屈</small> 今豐州 關口<small>今儒州</small> 栗</p>	<p>口 栗<small>一云</small> 今殷栗縣 長淵今因之 麻耕伊今青松縣 楊岳今</p>	<p>安嶽郡 板麻串今嘉禾縣 熊閑伊今水寧縣 甕迂今甕津</p>	<p>縣 付珍伊今永康縣 鵠島今白嶺鎮 升山今信州 加火</p>	<p>押 夫斯波衣縣<small>史一云仇</small> 牛首州<small>次首一作頭一云鳥乃首</small> 伐力川</p>	<p>縣 橫川縣<small>斯一云買於</small> 硯縣 平原郡<small>原北</small> 奈吐郡<small>大提云</small> 沙</p>	<p>熱伊縣 赤山縣 斤平郡<small>並一云平</small> 深川縣<small>斯一云買伏</small> 楊口郡<small>云一</small></p>	<p>要際 猪足縣<small>斯一云鳥</small> 王岐縣<small>次一云丁皆</small> 三硯縣<small>波一云密</small> 狹川</p>

